

44. 20200505 ウバメガシ林について

1. ウバメガシ林は暖温帯の海岸林の一典型である。太平洋岸で、海に面した風衝地で母岩の露出したような崖地に主として成立する。三浦半島を分布のほぼ東限とし、伊豆半島南部から西の各地を分布範囲としている。紀伊半島には特に発達しているが、海岸地帯だけでなく、内陸丘陵地の土壌の浅い乾いた貧栄養地(たとえば尾根すじなど)にも、しばしばウバメガシ林が見られ、その一部は標高700~800メートルにまで及んでいる。
2. ウバメガシは昔から良質の木炭の原料にされたが、近年はその用途が少なくなり放置されている。かつては伐採が繰り返されたため、いまでも萌芽林の形を残すところが多い。
3. ウバメガシ林成立の気候要因としては、いろいろな考察がなされている。種の分布範囲は、年平均気温15度C、1月の平均気温が約4度Cを限界線としているが、群落成立の条件は年平均気温16度C以上であるとみなされる。雨量の多少は直接ウバメガシ林成立の要因とはならず、土地的要因が関係しているようだ。風衝岩崖地に先駆的に群落を作り、それが持続される。受光量の要求度も高く、海面からの反射光も利用していると考えられる。
4. 海に面した傾斜地のウバメガシ低木林は、ふつうトベラ・ヒメユズリハ・マルバシャリンバイなどを伴う。また上層にクロマツ、下層にハマヒサカキ・ススキなどを伴うところも多い。同じ海岸線でも斜面の方向でウバメガシ林の構造は異なる。北面のあまり乾生的でない受光量の少ない斜面では、ツバキ・タブノキ・スダジイなど、照葉樹林の構成種が加わる。海岸線から遠ざかるにつれてこの傾向は強まり、次第にウバメガシはその優先性を保てなくなる。
5. しかし、平坦地でいったん林冠がウバメガシに覆われると、その林相は長く維持され、容易に次への遷移の傾向は示さない。

「図説 日本の植生(講談社文庫)」からの引用である。

【メモ】1. 材は硬く、備長炭の原料にされる。

2. 和歌山県の県の木はウバメガシである。(愛知万博で展示されていた。)

三重県や和歌山県の海岸沿いではたくさん自生している。

3. 春に花が咲き、その翌年の秋にドングリが実る。(2年成)

4. よく生けがきに利用されているが、剪定するので、ほとんどドングリはつかない。

よって街中や住宅地ではドングリにお目にかかることはまずない。

5. ブナ科 コナラ属

6. 雌雄同種の高木常緑広葉樹である。

